

第八回教育長杯島根県高等学校弁論大会優勝（H一七・二一・一七松江北高校 於）

ありがとうそしてさようなら

益田東高等学校 3年 普通科 藤井孝太

小さい頃はそうは思いませんでした。普通に砂場やブランコでみんなと遊んでいました。あの頃が一番良かった：何にも考えず遊びに夢中になれたから：

私の家族は父と母、おばあちゃんと兄、そして姉の六人の大家族です。ここまではどこにもある普通の家族です。でも私の家は少し違っています。それは姉が障害者ということです。姉の障害は知的障害といい、普通の人より脳の発達が遅れている人のことを言います。姉は今十八歳、でも精神年齢はまだ六歳なのです。

私が姉を障害者だと気づいたのは、小学校四年生の時、友達の一言がきっかけでした。「頭のバカが行く教室」：何かが私の胸に突き刺さったような、そんな気分であまり早く、母にそのことを話しました。すると母はすべてを私にうち明けてくれたのです。小学四年の私がすべてを受け止めるにはとてもまだ苦痛でした。それがだんだん嫌になり、障害者の姉がいるということがとても恥ずかしく思えるようになりました。そして私の中で姉の存在を消すようになったのです。

正直死んでくれと思いました。私の姉が障害者なんて絶対誰にも言いたくないし、言えばバカにされると思うって言えませんでした。そのことがとてつもなく重くのしかかりました。姉のことはこの世から消したいほど嫌でした。なんで私だけがこんな嫌な思いをしてまで毎日生活しないといけないのだろうか、なんで私だけがこんな嫌な思いをしてまで毎日生活さえないければ：家では姉のことで毎日母と喧嘩をしていました。

「何でさあ：姉ちゃんみたいなの、ろくでもないもんならよ：。」とか「ねえ母さん、ほんと、お願いじゃけえ：姉ちゃんをみんなと同じクラスで勉強させちゃくれんじやろうかあ：。」など、無理なことばかりを言っただけで母をいつも困らせていました。でも母は決まっていたように「なんであなたはその考えしかできないの？」と言っただけで寂しそうな顔でいつもこっちを見てくるのです。私にとっただけは家のお荷物だったのです。早くどこかに捨ててしまいたいくらいでした。母も本当は心の底でそう思っているんだと勝手に考えていました。ところが、あることがきっかけで本当は違うのだということがやっとわかったのです。

それは身体障害者を対象とする運動会のボランティアを体験した時のことです。初めは全く行く気がなかったのですが、ボランティアの人数がたりないということで、仕方なく参加しました。そこで見たものは、車椅子の人たちや手足の不自由な人などたくさんの人たちでした。車椅子を押したことの無い私は自分勝手に押していました。車椅子の方が困ったような顔をしていたので、変だなと思っ少しスピードを落とすと「すまないね：」と感謝の言葉を言ってくれました。常に相手の気持ちになって押してあげることが大切なんだとその時に気づいたのです。

ふっと姉のことが頭に浮かんできました。相手の気持ち：今までの私は自分のことだけしか主張していませんでした。相手の人の気持ちなんて考えたこともありませんでした。姉の気持ちや母の思いをずっと踏みにじってきた私の方が、すごい恥ずかしいことではないかと思っしました。姉は姉らしく、私は私らしく、お互いを尊重しあえればそれでいいのです。障害者というだけで、姉をどこか見下していました。人間はみな平等でなければならぬのです。上から人を見下ろすのではなく、同じ目線に持つてくれば見えてくるもの、伝わってくるものがたくさんあると思います。

私は本当に変わることができました。あの日の体験がなければ姉を、お姉ちゃんを殺していたかもしれません。あの日の体験や出会いは一生忘れることはありません。すばらしい体験をありがとう。そして昔の自分にさようなら。

第二十九回全国高等学校総合文化祭弁論部門 最優秀賞（H一七・七・二十九・三十）

第五十一回文部科学大臣旗全国高等学校弁論大会 文部科学大臣奨励賞（青森県十和田市）

平成十七年度島根県青少年芸術文化表彰受賞 平成一七年度益田市スポーツ・文化表彰受賞

第八回教育長杯島根県高等学校弁論大会三位

今の自分と明日からの自分

益田東高等学校

3年

自動車科

松尾竜起

私の父は昔からお酒が大好きで、私が生まれた頃には夜遅くまで飲み歩いて酔っぱらって帰る日が多くありました。具体的には言えませんが、言葉では言い尽くせないくらいの嫌な思い出があります。そのことで父と母はよく言い争い、喧嘩をすることが多く、私の気持ちはいつも沈みがちだったことを覚えていきます。

私には三人の兄がいますが、三番目の兄とは十歳も歳が離れているので、よくかわいがってくれました。小学校の三年生の頃までは兄たちとプロレスごっこをしたりして遊んで楽しいこともありました。ところが三人の兄が大学に進学して、それぞれ東京で生活するようになり、私が一人になった頃から自分の心身を自分でコントロールすることができなくなりました。具体的には激しい頭痛と視力の低下です。視力は一時は0・09までさがりました。病院に行くと、心因性の症状であり、「君は何か見たくないものがあるのではないか？」と医者に言われました。視力の低下を何かのせいにするつもりはありませんが、見たくないものは父と母の喧嘩だったかもしれません。

ちようどその頃、私は母にこう聞いたのです。「うちには子どもが多いけど、本当に僕が欲しかったの？」と。多分父や母に対する不満や恐ろしさがあったのだと思います。母が言うには私は幼い頃「手のかからない、とてもいい子だった」そうです。今思うと、別にいい子だった訳ではなく、ただ父や母が怖くて言いたいことも言えず、我慢することでもいい子を演じていたのだと思います。そしてそれが当たり前になっていた感じがします。

心身に異常が現れてからは学校に行けない日が続くようになりました。母は毎日「学校に行け、学校に行け」と強く言うので、行かなければいけないという義務感に縛られるようになりました。母が強く言えば言うほど嫌なものから逃げたい、隠れたい、姿を消したいという、もう一人の自分との間で悩み苦しみました。あげくの果てにはとうとう全く登校できなくなりました。

父のお酒と、私が学校に行かないことが加わって、父と母の喧嘩はますますひどくなる一方で、それが怖くて眠れなくなりました。そして昼夜逆転の生活が続きました。この頃の生活習慣は今も完全には直っていません。中学三年間もこの苦しさは続き、私にとっては忘れることのできない長い闘いの日々となりました。特に酔って自分を見失ってしまった父には、腹立たしい気持でいっぱいになり、完全に父を拒否していました。話もしなかつたし、顔を見るのも嫌でした。時には存在自体も否定したい気持がありました。

その頃の私にとって唯一の楽しみは学校に行けない私を心配して、友達が家に遊びに来てくれることでした。私にとって友達存在はとても言葉では言えないくらい大きなものでした。固い氷が温かい日射しで一滴ずつ溶けていく思いがしました。そしてある時、お酒にばかり依存していた父は、病院に行き入院しました。お酒をやめる努力をし始めたのです。今も飲まずに頑張っているのです。家庭は少しずつ落ち着きを取り戻し、今は喧嘩も少なくなりました。私も少しずつ、父と話ができるようになり、気持も通じるようになりました。母の苦勞も不思議と今ではよく理解できるようになりました。

今となれば、私が経験した多くの苦しさは自分の人生にとって、逆に目に見えない大きな力になっていくのではないかと思っています。今、こうして元気で楽しく暮らすことができるようになったのも、辛い日々があったから余計に強く感じます。

私もこの春からは福祉の大学に進むことになり、故郷を離れて一人暮らしになります。父も母も頑張っています。父や母のためにも、もちろん私自身のためにも、残りの高校生活を精一杯頑張りたいと思います。